

その1 変わる香港漫画界～「一漫年出版」終焉、「大渡」の攻勢

「深く美しき香港漫画の世界」制作後、香港漫画界は目にみえて景気が悪化し、危機に陥ってしまいました。これまで精力的に活動してきた版元も、次々と吸収合併や漫画制作縮小の憂き目に…そんな中、ひとり気を吐く新出版社「大渡」のお話を。



「新著 四大名捕」

(司徒劍橋 2013 年)

最終第 8 巻。悲しいお知らせが巻末に…。

T 「司徒劍橋さんとプロデューサーの杜比さんとやってた会社『ONE COMICS 一漫年出版』はもう、あってないようなものです。負債がすごく増加してつぶれちゃった。本が売れなくなって、それでもスタッフ抱えなきゃいけないから、赤字が増大して負債で首が回らなくなっちゃったんですって」

K 「うん」

T 「『新著 四大名捕』の第 4, 5 巻ぐらいのころ、すでにもう首が回らなくなったらしくって。第 6 巻で『この本は第 8 巻で完結にします。理由は最終巻で明らかにします』って告知が来ました。それで」

K 「最終巻で明らかになったのは『カネが無え』ってことですか」

T 「ええ。『カネがないんで、文化傳信公司に身売りをします』と」

K 「でも譲渡を受ける文化傳信にしても、作品の制作を継承する気はなかったわけですね」

T 「そう。『漫画制作はやらないヨ』っていうのが条件だったらしいです」

K 「それは情けないですよ～！もとは黄玉郎が創った会社なのに」

T 「ほんとにねえ。よく考えてみるとそう、文化傳信はもともと黄玉郎がつくった『玉郎出版』ですから。今は黄玉郎は全くかかわってないけど。でもその文化傳信も、いまは漫画制作にヤル気ナッシングなんですよ」

K 「なるほど」

T 「で、去年設立の新出版社『大渡』が、地元で漫画制作をやりたい人間を吸収してて。司徒劍橋を始め今は皆ここにいます」

K 「(大渡作品の巻末広告を見て) あれ？これは『李小龍』？」



- T「あ、それも今回仕入れてきました。今日はちょっと持ってきてないんだけど」
- K「鄭氏出版のやつとは違う？」
- T「あー、あれとはぜんぜん違います。鄭氏出版の『李小龍』は別に、本人に似せてるわけじゃないじゃないですか、オリジナルキャラで」
- K「『龍虎門』の親戚みたいな絵ですね」
- T「そう。それに対し、この『我是中國人 李小龍』はほんとにブルース・リーの伝記漫画です。完全に本人に似せた絵柄で描かれてます」



日本刀の達人「三倍晋安」と対決する李小龍。
伝記とはいえフィクション要素は強い。香港漫画だから。

- K「しかしブルース・リーは早々と香港を出て行った人間なのに、どうして『中華の誇り』みたいに祭り上げられちゃうんでしょうか」
- T「そうそう。『わたしは中国人 李小龍』（タイトルの意味）だなんて」
- K「本人は別にそういう気はなかっただろうに」
- T「うん。映画で中国が『アジアの病人（東亜病夫）』みたいな言われ方をしてて、それに反発するみたいな？」
- K「『ドラゴン怒りの鉄拳』ですね」
- T「その文脈でこういうことを言ってるの？と思うんですが」
- K「あれはそもそも…まあ噂にすぎないのかも知れませんが、そのむかし『日本に腕の良いスーツの仕立屋がいる』と聞いたブルース・リーが来日して仕立屋に行ったら邪険に扱われて、怒って出来た企画だって聞いたことがあります」
- T「なるほどー、それで『怒りの鉄拳』だったわけですね」